反ってYをかばうと云う態度に出る様な祖母の溺愛を来す結果となり、悪くはなっても改善する方向へは進まないものであった。かくして小学校—中学校の生活がつづき今日に至るのであって、母と子の密接なつながりのない、又父親を知らないYの性格のゆがみは小中学校の性行査定に見る様なものとなった。小学校では第四学年までは性行の平均は二・六三—二・四六—二・五八で一般より低く、特に二—三—四—七—十六—十七—二一の各項目が低い、そしてこれらは我儘と関係が深い項目である。精神発達の面からも云える事ではあろうが、第五学年から性行点は上昇し平均で三、五四—四、〇九となった。これは教師の指導もあり、クラス役員や児童会書記などをする様になって態度に変化を見た様に思われる。然し家庭では相変らずであった。又交友関係は一般に自分よりも知能的にも低いものを選び、それらの友人を自分の思う様に使うと云う様な点も注目される所である。彼の場合は程度の高い我儘と云える。

中学校時代の性行は平均に於て三、七五—四、三七—四、六二と少しずつ改善されている。然し六—七—八の各項目に於て一般と低い水準にあり、我儘的態度の関係ある項目である事を考えれば、中学生に於てもその影響が尾を引いている。一般に親達が考えた様に成長と共に直ると云う意見はY少年の場合にはあてはまらない。

私の考えではこの性格形成には素質も考慮されなければならないと考える。Y少年の父親の事はよくわからないが、その姉や姉たちの親は我を通そうとする態度の人一倍強い点がうかがわれる。

兎に角生活環境が一般調査に現われた我儘の原因の多くを一人じめしておりその改善が不可能な家庭であった事は、性格形成のゆがみとなって結果したものであろう。以上保育機関に入って直る程度の我儘と直らない場合とを分ける事が出来たが問題は後者である。

幼児指導のためのパーソナリティの一調査

——中間報告——

北海道立教育研究所員
小林幹夫

1 目的と研究経過

過去数年の現場における幼児指導を担当し、更に其の間に種々当面した研究活動を通じて、最もむずかしい問題はパーソナリティの問題であった。日々の指導に迫られ、こういう事柄が学問的に又実際的に解決出来なければ真の意味のしつけをはじめ、保育問題としてのケースワークとかグループワークの実際に確信もってのぞめないのではないかと考えるにいたった。（此の事は発表資料の序にも一部ふれてある）

その為にはどうしても科学的方法のたすけをかりねばならなかったのであるが、何せ一つの方法として心理学的な接近にしても、報告者の能力もさることながら、おいそれと適確な手法を示してくれない。とにかく苦しまぎれでも幼児指導の為パーソナリティの研究の必要にせまられ、どうにか役に立てたいとこんな風にもやってみたという程度で、今後を期してさらにつみあげ進むことにし、中間報告とさせていただく次第である。調査研究の過程は昭和二十四年より三年間現場指導で事例研究を主体に、ついで基礎的（理論研究）

昭和二十七年より当教育研究所で担当し、昨年より実験施設をもうけ調査研究をマッチさせてゆく方法をとり、道内各市の幼稚園拾数施設にも協力いただいて次の節にのべる方法で研究をすすめガイダンスの中心問題に焦点をしぼっていった。本報告は特に昨年（30年度）実施したものを中心に述べることにする。

2　調査方法と対象

パーソナリティの研究だけをきりはなしてやったのではなくいろいろの方法をからみあわせて調査を進めたので、そのからみあいの中でそれらがパーソナリティを重点的にとりあげたので一応調査のアウトラインを示すと（其の一）の表にあげられる、第一回の実施の仕組は（其の二）（其の三）のようになる。それらの表にあらわれる調査の対象は実施期日とともに（其の四）に一覧にした。

（A）幼児調査用紙は（其の一）の表による構成をもっていて、所謂インベントリの形にも考慮され一部はすぐ幼児指導要領そのままに記録しうる様にもはかった。いろいろの要素を周辺において、項目（8）が本報告の中心をなすものでそれは資料として一覧してある用語からなっていて、（8）は両親が夫々の自分の子について評定する。一方場面観察を主眼に教師が別に手引をもって要領を示した方法で（B）が観察記録される仕組になっている。評定語の項目にあげた用語は第一に容易に行動の評定できるようにあらかじめ用意し、手引にしたがって丸でかこめばよいように配列し、幼児のパーソナリティを語群でとらえるようにした。（仮にクラスターで記述表現すると云うことにする）

第二に価値観や又場面（シチエション）になるべくとらわれないように用語を準備した。その為に単に二分法（Dictomy）にはいらないように対 positive : negative にし、群を表のように工夫し配列した。三種

調査全般の概要と性格（パーソナリテイ）調査の仕組

——其　の　一——

A，幼児調査（家庭を含む）

調査項目

（1）住居生年，（2）保育歴，（3）家族調査，（4）家庭環境，
（5）対人関係，（6）病歴基本習慣，（7）家庭に於る幼児の保育問題
（8）性格調査，（9）しつけ問題，（10）ガイダンスの為の諸事項，
（11）家庭教育上の意見，

B，性格調査（教師評定）第一形式，第二形式

C，問題児調査

D，知能検査，身体検査

——其　の　二——

幼児指導の調査実施要領（前期）

（特に集中的に行われる主なる作業を月別に列挙する）

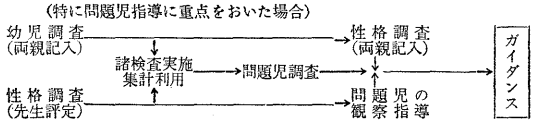
3　月	4　月	5・6・7月	8　月	9　月
新入園児幼児調査	幼児調査集計並びに指導対策	身体検査，性格調査知能検査，問題児調査，家庭訪問	保育相談（先生・父母・学識者）地域別年長年少組，個人別	先生と父母の立場で性格調査再検討，問題児調査指導対策

後期は，これに順ずるが，とくに年間の総合評値の観点を加味する必要がある。特に進学者に対しては，学校側，他の施設間の連絡を密に，協議などで上記の資を提供しあう事が望ましい。

——其　の　三——

仕ぐみ（機　能）

（特に問題児指導に重点をおいた場合）



——其　の　四——

—種　別—	—対　象—		—期　日—
幼児家庭調査	（道南806家庭対象）		30年3月～6月
幼児性格調査	第一次　家庭・施設	1600名	〃　〃
	第二次　実　験　図	120名	〃　3月～9月
	第三次　〃	350名	〃　6月～31年2月
問題児調査	函館全市小学校	623名	〃　3月～8月
	〃　幼児園	1027名	〃　3月～4月
	美唄市の小学校		〃　9月
	〃　幼稚園		〃　9月
知能検査	（実　験　施　設）	250名	30年度31年度の2回
性格観察記録	（幼児性格調査と合わせて実施）		約1000名

の同義語を適当にあんばいし信頼性にそなえた。一覧表下欄に検定共通語としてあげてあるのがそれである。ともあれ、幼児のパーソナリティスクエアといおうか主なる構造がそれだけの数で概観できるようでなければならない。それには R. Cattell. 1946 の研究が非常に参考になった。その三五対のクラスター（cluster）を骨子に、更に阿部氏のトポロジカルな研究の評語、淡路氏、児童母性研究会の案其の他の評定尺度の用語を参考にして作成した。

3　結果の考察

第一段階としては、あくまで一人一人の幼児の施設内の集団生活の中に、又家庭生活の中に望ましい性格が形成されるのが主眼である。そういう為にどういう効果が結果として得られたかということと、それらの資料を学問的にも利用できればこれにこしたことはないが、この位の調査をやったといった所で、そうやすやすとうまい結果といおうか、みるべき法則性など把握できると思はれないが、当初、予想をたてていたことで、大体の傾向程度といった見通しも得たので、二、三つけ加え参加に供したい。先ずどうしても幼稚園でそなえつける必要のある指導要領の記入に大層便利で適確な資料を得られたこと。

幼児の記録には、適当な評語を用いるならば或る程度、指導に役立つつかまえ方ができる。その為に、パーソナリティの主なる構造に概観をあたえる仮りにクラスターと呼んだわれわれの評語としかも対であたえられ提示されることは、幼児の場合のように他の質問紙とか自己記録、プロゼクティブな測定など大変面倒な時には特に有力である。

指導の際有効であった事例を一々あげることはぶくが、中でも幼児自体のアンビバート（両自性）といってよいか、集団の場面と、家庭内とか場面がちがえばある項目について両極の姿を示すことがつかめたこと。われわれがなっとくづくと称し努力している幼児の指導の数に教師と両親とすべてになっとくしあって一致してあたることにこれほど有力な資料を提供してくれたことはない。それらは家庭訪問の折、又保育相談に望ましい好結果をおよぼしつつある。又両親の幼児教育に対するいろいろな意識が浮かびあがるのでそれらの向上にも役立っている。

更には幼児像の上に、なにげなくみすごされていたもの又無視していたものが指適される。

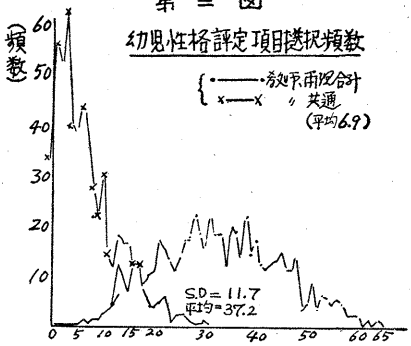
幼児像をさらに追究し、望ましい指導の数にこれらの資料を分折利用することを試みよう。主なるものは資料に提載したものによって説明を加えてゆくことにする。

第一図（略）はそこに説明を加えてあるように、○印でかこんだ評定語がどういう具合に幼児をあらわすために教師と両親が選んだかを、一方に教師の軸他方に両親の方からもそれぞれの側からわかるように図示したもので、スペースの関係で、みやすくするため 0～100 を拡大してある。又個人毎にその両者の選んた項目数を幼間にして五七七人について相間を求めてみると○、一五を示している。相間は高くないことがわかる。どれほど項目が選ばれているか表示したものが第二図（略）に頻数の比較され、それぞれ平均とS・D（標準偏美）を求めて示した。頻数の多い順にならべたのが附表にしめしたスペースの関係で三分の一をのせるのにとどめた。

両者が一致して選んだ項目を仮りに「共通」と名づけると、その選ばれた項目数の頻数を示したものが、第二図の両者の合計と共に第三図に示した。二つの分布を比べると興味がある。累積頻数多角形（ポリゴン）で示してあるが総計の方は正視型のような正確にはたしかめられ

第三図

幼児性格評定項目選択頻数



てよいが確率の具合からおしはかっても二項分布のNが多くあるにしたがい、「共通」の分布は、ポアソン分布のような型を示し、これについては第六図(略)とともに分析を進めつつある。或る施設の年長組と年少組、それも年長組を同数の三十年度入園のもの、前年度よりのものを同数ずつ出し、年に二度、六月と翌年二月、教師と両親の総合評定を比較し、それらに有意の差があるか、又どんな問題があるか、現在にX^2テスト位しかやっていない、が頻数だけでは困難なので他の方法を考慮中でこれと平行して、知能検査と評定による性格構造との分析とともに(一五〇名対称)今回の報告には間にあわなかった。

表にのせてはないが他附県例えば香川県でやった施設むけのしつけ調査を今度は両親むけに一つは(家でどんなしつけに留意しているか)他に(施設に対してどんなしつけをのぞむか)を質問紙多肢選択で調査では次の表のようになる。今回の調査に〃自分のことは自分でする子〃というのが教師評定と、総頻数で一番多く両親評定では八位である。実は此の頃家庭に対して行ったしつけ調査ではどちらも最上位で、親の目にはわが子はまだ「自分のことは自分でする事」とみれずもっと望んでいることになる。其の他も表によって判断いただくことにしていただくことで問題を提示するだけでとどめ、問題児調査という、入学前の幼児の中での問題児は小学校え入ってからどのようにあらわれるか、一地区で行った調査の表も次にあげパーソナリティとの問題は時間のかんけいでかつあいする。

第七表

順	家庭で留意しているしつけ	頻数	順	家庭から施設にのぞむしつけ	頻数
1	自分のことは自分でする	590	1	自分のことは自分でする	421
2	危険な遊びをさせぬ	452	2	仲良くあそぶ	403
3	ことばのしつけ	405	3	うそをいわない	370
4	いゝつけを守る	339	4	他人に迷わくをかけない	308
5	早ね早きを守る	325	5	言語のしつけ	306
6	手洗い・うがい	319	6	あとかたづけ	290
7	体のせいけつ	293	7	呼ばれた時の返事	273
8	あとかたづけをする	283	8	社会性明朗性	264
9	食事のしつけ	277	9	約束を守る	233
10	あいさつする	269	10	もちもののせいとん	219
11	ねまきを着せる	258	11	いろいろのあいさつ	209
12	お行ぎよくする	219	12	自発的に処理する	204
13	金銭について	196	13	危険のものをもたぬ	187
14	平　等	171	14	身辺の清けつ	177
15	規則正しい生活	151	15	食事のしつけ	172
16	手伝ひ	143	16	公　平	172
17	排便のしつけ	140	17	物品のとりあつかい方	161
18	おやつについて	127	18	はきものをきちんとする	159
19	はでな服装はさせない	119	19	身なりをきちんとする	131
20	時間的かんねん	100	20	遊び方	109
21	一人あそびをさける	92	21	姿勢について	102
22	崇　拝	81	22	室内をはしらない	75
23	ひるねをさせる	37	23	排便のしつけ	64
	計	5.386		計	5.009

4　今後の問題

資料にあげてある項目について簡単に述べる。

1、指導に役立てる為、他の調査との関係においての問題点(問題児調査しつけ調査、生

育歴環境調査等とのむすびつき。）

2、性格（Personality）の科学の問題と採作的方法、（更に現在進めつゝある研究について）

3、行動評価のための方法の確立（行動評価と場面の問題、教師・両親の観点、評定の信頼度、共通評定項目の検定の見通しなど。）――表並びに参考資料略――

4、むすび

（1）については一例として本文にもふれたが更に他人関係、兄弟の位置、家族構成などもくわしくしらべてあるのでそれらとからみあわせて更に分析をすすめつつある。さしあたって分析法が有力であると研究を進めている。（2）については、拾数種のテストをもちい小学五年中学二年正常集団とし特種学級少年院を異常集団とし性格研究をすすめつつあるのではやく幼児のクロスセクショナルな問題にある見通しをたて、シーケンシャルといおうか発達段階の研究、今回のクラスターを用いての表面的な研究から源泉的な研究にすすめたい。現在三百数十のアイテム情意テストを実施し因子に分折的研究にアプローチしようとしている。（3）については指導要領の改訂にともない是非必要で資料のような観点で検訂を進めている

以上、結論といっても、まとまったためぼしいものもない不完全なまま報告をおえる。

幼児の生活発表

神田寺幼稚園

栗田成子

一、序に

前々から私どもの幼稚園では、幼児の言語生活を豊かにし、併せて生活指導に役立てるために、毎週月曜日の朝、前日の生活経験を級の皆に分る様に発表させることにしている。私は子供達をよりよくみつめるために、それを出来るだけ記録してきた。

昭和二八年に、一応のまとめとしてこの記録をもとに、子供達はどの様な環境に育っているか、又どんな事に興味を持っているか、どんな生活経験をしているか、その中でどんな言語表現をもっているか、どの様な文型を使用しているか等について発表した。

その時の子供達は幼稚園を卒業して小学校に進学した。私の手許には、この子供達が三才から五才までの三年間に渡って発表をした記録が残った。全員の前で自分の思ったまゝをその年齢としての適当な言葉で、その上に人によくわかる様に発表することは、民主主義の世の中では特に大切な力だと思う。この力は全部の子供に育てゝやり度いと思う。私が三年間つゞけて記録した二五名の子供達のうちでいつもつづけて発表する子供もあれば、三年間一度も発表をしなかった子供もある。

全部の子供が話せる様にしたいと思うのに、どの様な理由でこの様な差が出来るのか、話せない子供にはどの様な指導をしたら話せる様になるか、母親や仲のよい友達とは進んで話す事が出来るのに多勢の前で発表する時になるとだまってしまうのは何故か、その障害をとり除いて発表し易い様に仕向ける必要がある。子供達が残してくれた生活発表の記録をもとに、生活発表を進め又は阻む因子は何かという事を調べてみようと思った。始めから研究を目指してとった記録でなく保育をやりながらたゞ自分の受持った子供達を良くしたいと思った上での記録なので対象も少なく、研究型態も整わな